

第13回国際エチオピア学会

河合 雅雄

第13回国際エチオピア学会を日本で開催することになった時、とっさに頭の中をよぎったのはうまくいくかどうか、といった危惧だった。日本は地理的に国際学会には不利である。アフリカやヨーロッパからは、時間もかかり航空運賃も高いから、多数の参加者が望めるだろうか。また、長期にわたる不景気の中で、大会経費が集まるだろうか、おそらく一般募金は絶望的であろう。開催日を12月12日という年も押し迫った寒い日に設定したのも、全く経済的事情からである。観光シーズンを離れると、ホテルその他が格安になるからで、はるばる来られる外国の人には秋の京都を満喫してほしいという気持は山々だったが、致し方がなかった。

大会は、みなさんの懸命ながんばりのおかげで、大成功だった。エチオピアからの47名を筆頭に、14ヶ国130名の外国からの研究者と日本からの77名、計207名が参加し、熱心な発表と討論が繰り上げられた。内容はじつに多彩で、歴史学、言語学、哲学、美学、法学、政治学、経済学、ジェンダー、キリスト教学、開発と環境、考古学、民族学、人類学、霊長類学、農学など、エチオピアとその周辺に関する学問分野の大半が論じられ、地域研究の妙味を如何なく発揮した大会になった。日本人は18名が発表した。全会期間の出席者は少ないので、発表会場は大部分外国研究者によって占められ、あたかも外国で開かれた学術大会のような雰囲気をかもしることが、印象に残った。

発表以外にも、いくつかの行事が行われた。大会前10日～11日の広島、奈良、伊勢・志摩、大会後18日の国立民族学博物館へのエクスカージョンには多くの人が参加されたが、とりわけ広島への希望者がとくに多く、原爆への高い関心が伺われた。この他、12日には「エチオピアからの発想」のテーマで、タフツ大学のツァハイ・B・セラシエ助教授、シカゴ大学のドナルド・レヴィン教授と河合雅雄、

山形孝夫、諏訪元による公開講演が開催され、エチオピア学の意義と大切さを市民に披露し、好評であった。エチオピア映画祭（京大会館、ホテルサンフラワー）は辺境に住む人々の貴重な民族学的映像で、視聴者に多大の感銘を与え、アート・エクシビジョン、野町和嘉氏の写真展、クィーン・シバ舞踊団によるエチオピアの民族舞踊など、盛り沢山の附帯行事があり、大会を盛り上げた。

小さな国際学会としては、大会の運営と行事全般にわたって、最大の努力がなされたと思う。外国人参加者からも多くの讃辞と満足が表明された。大会委員長としてはうれしい限りであり、感謝の念一杯である。こういうことが可能になったのは、スタッフのみなさんの努力はもとよりであるが、福井研究室をはじめ若い人の献身的なボランティア活動によるものである。2,434ページ、3分冊のプロシーディングスの完成がその一つの証左であるが、これを見たとき私は思わず感嘆の余り言葉を失った。重田真義さんを中心に、若い人たちが徹夜につぐ徹夜で作って下さったものだ。若い力の偉大さを知ったことは、本大会の大きな収穫だったと思う。

最大の難物は、募金であった。学会の性質上、また不景気のさ中、一般募金は難行した。大会がなんとか成立にこぎつけたのは、格別の御尽力を頂いた梅棹忠夫先生、各財団、企業、個人の方々の拠金のおかげであって、この場を借りて暑く御礼申し上げる次第である。そして、本大会の成功は実行委員長の福井勝義、副委員長の栗本英世、重田真義3氏の献身的な努力と剛腕による所が多であることを記し、事務局をはじめ関係各位の御尽力に改めて感謝の意を表したい。

(かわい まさお

第13回国際エチオピア学会組織委員長、
日本ナイル・エチオピア学会会長)